

共同行為のミニマリズム

三木那由他（大阪大学）

クラスみんなで掃除をする、友達と一緒にパーティをする、あなたと私で買い物に行く、……。複数のひとが一緒になって何かをするという行為を「共同行為」と呼ぶが、共同行為は日常でありふれているとともに、私たちが単なるひとつの個人を超えてほかの人間とともにおこなうものであるという点で、もっとも基本的な社会的現象であるとも考えられる。

複数のひとが同時に何かをするというだけでは共同行為にはならない（交差点で信号が変わるのを待つ人々や、信号が変わって歩き出す人々はたいていの場合には共同行為をしているわけではない）。では、複数のひとが何かしらの動作をしている状況に、いったい何を付け足したら共同行為となるのか？ 言い換えると、共同行為の成立条件とはいったい何なのか？ これが共同行為論と呼ばれる分野の中心的な問題となる。この点は、ジョン・R・サールの問題提起がうまく表している。

次のような例を考えてほしい。人々の一団が公園のあちらこちらに座っていると想像してほしい。いきなり雨が降り出し、人々がみな立ち上がり、同じ場所へ、公園の中央にある雨宿り場所へと走ると想像してほしい。人々はそれぞれ「私は雨宿り場所へ走っている」という文で表現されるような意図を持つ。だが、そのそれぞれのひとについて、そのひとの意図はほかのひとの意図や振る舞いとはまったく独立であると考えることができる。この場合、集合的な振る舞い[訳者注：共同行為のこと]は存在せず、ただたまたま同じ目標へと収斂する個別の行為の系列があるだけである。さて、今度は公園にいる人々の一団が集合的な振る舞いの一部として同じ場所に集まる場合を想像してほしい。そのひとたちは野外バレエに加わっていて、振り付けによって出演者がみな同じ場所に集まるよう求められているのだ。さらに二つの場合において外から見た身体運動は区別不可能だと想像することさえできる。雨宿りのために走る人々はバレエ・ダンサーたちと同じ身体運動をするのだ。外から観察すると、ふたつの事例は区別不可能であり、だが内的には明らかに異なっている。その違いとは正確に言うとなんのか？ (Searle 1990, p. 403)

本レクチャーではまず、共同行為論におけるもっとも代表的な論者として、サールに加え、マイケル・E・ブラットマン、ライモ・トゥオメラ、マーガレット・ギルバートを取り上げ、このそれぞれの論者がどのような共同行為論を展開したのかを概観する。

これらの論者がいかにも共同行為と見なされるような事例を考察の対象としながら、議論を展開している一方で、近年では典型的な共同行為ではないがギリギリ共同行為と呼べ

そのような事例を検討することを通じて、従来の分析をよりミニマムなものへとダウンサイジングしようとするミニマリズムというアプローチも展開されるようになっていく。

ミニマリズムの展開のなかで、主な検討対象となっているのは相互信念の必要性である。先に挙げた代表的な論者は、それぞれ立場において違いはあるものの、大きくふたつの見解を共有しているように見える。

1. 共同行為の参加者たちは何らかの意図／目的／コミットメントといったものを共有している。
2. 共同行為の参加者たちが当該の意図／目的／コミットメントを共有していることは何らかの仕方で参加者間の相互信念となっている。

ミニマリズムの流れのなかでは例えばカーク・ルドヴィグのように第一の見解に焦点を当て、共同行為の条件を捉えるうえで意図という概念は強すぎるため目的という概念に広く置き換えていくべきだといった議論を展開する論者もいる(Ludwig 2020)。とはいえ、多くの論者はそのミニマリズム的なアプローチによって、第二の見解が不要であることを示そうとしている。例えばオッレ・ブロンベリは、従来検討されてきた事例では第二の見解で述べられているような相互信念が必須であるように見えるのに対し、ある種の事例ではそうした相互信念が成立していない（相互信念の成立と矛盾するような信念を参加者が持っている）ということを論じている(Blomberg 2016)。さらにユリウス・シェンターはこの点をさらに推し進め、相互信念が成立していないことが必要条件となるような共同行為の事例（「幸運な共同行為」）を指摘している(Schönherr 2018)。

本レクチャーはそうしたミニマリズムの流れも簡単に紹介し、さらに私自身のミニマリズム的な提案についても述べたい。具体的には、私は上の第一の見解が(a)共同行為の参加者たちは共同行為の開始時点においてある目的 G を共有している、(b)当該の共同行為は G が達成されたときに完了し、G に与えられた記述のもとで同定されるというふたつの命題から成っていると見なしたうえで、(b)が成り立たない事例が存在すると考えている(Miki forthcoming)。そうした事例を取り上げつつ、それが持つ含意やコミュニケーション論との関係について論じたい。

文献

- Blomberg, Olle (2016) “Common Knowledge and Reductionism about Shared Agency,” *Australasian Journal of Philosophy*, 94(2): 315–326.
- Ludwig, Kirk (2020) “What Is Minimally Cooperative Behavior?,” in Anika Fiebich ed., *Minimal Cooperation and Shared Agency*, Springer, Cham: 9–40.
- Miki, Nayuta (forthcoming) “Concessive Joint Action: A New Concept in Theories of Joint Action,” *Journal of Social Ontology*.

Schönherr, Julius (2019) "Lucky Joint Action," *Philosophical Psychology*, 32(1): 123–142.

Searle, John, 1990. "Collective Intentions and Actions," in *Intentions in Communication*, edited by P. Cohen, J. Morgan, and M. Pollack, 401–415. Cambridge: MIT Press.